

## ぼくのランドセル



「おはよう。」

ヒロシは、くつばこの前<sup>まえ</sup>で、ユウヤにげんきよくあいさつをしました。

でもユウヤは「おはよう。」ともいわずに、

「おい、ヒロシ、おれのくつもついでに入れとけ。」

とめいれいするように、いいつけました。

ヒロシは、

「いやだよ。自分<sup>じぶん</sup>のくつは、自分<sup>じぶん</sup>で入れてよ。」

と、いおうとしましたが、

(ユウヤくんは、ぼくよりずっとけんかもつよいし、べんきょうもじょうずだし、いうこときいとかんとこわいもんな。)

と、かんがえて、くつを入れてやりました。

ヒロシが、きょうしつにはいって、自分<sup>じぶん</sup>のランドセルをたなに入れようとする、たなの下<sup>した</sup>にランドセルがおちていました。

「おや、ランドセルがおちている。だれのだろう。」

ヒロシがひろいあげてランドセルのなふだを見ると、大き<sup>おお</sup>く『ユウヤ』と書いてありました。

それを見たヒロシは、さっそく

「ユウヤくん！これきみのだろう。おちてたから、ぼくもってきたよ。」と、ユウヤに「ていねいに、わたししました。」



けれども、ユウヤは、おれいも  
いわずに、それを うけとり、たな  
に ポイツと 入れました。ヒロシ  
は、それを 見ながら 自分のラ  
ンドセルを ゆっくりと 入れまし  
た。

すると、こんどは、きょうしつ  
の すみの ほうに もう一つ ランド  
セルが おちている ことに きが  
つきました。

「だいじな ランドセル なのに  
よく おとすなあ。こんどは だ



れ だろう。」

手に とって うらを 見ると、  
小さく『トモオ』と かいて あり  
ました。

(なあんだ、トモオのか。あいつ  
おれより けんかも よわいし、  
べんきょうも へただし・・・)  
と おもいました。

「ようし。」

ヒロシは、トモオの ランドセル  
を ちよんと けりました。

ランドセルは、ころころと ころ





